

未来へのよりどころ

アルテピアッツァ美唄 びばい

「放っておけば、何もかもが自然にのみこまれてしまっ」
アルテピアッツァ美唄は、そんな北海道の厳しい自然の中にある。
炭鉱の閉山によって多くの人が町を出て行き、住宅は取り壊され、やがては森にかえっていった。
昔を偲ぶ建物が次々になくなる中で、廃校になった旧小学校校舎の一部が残された――。

文・鷺尾 梓
写真・平澤 保

かつて炭鉱で賑わった町に残された、木造の旧校舎。幼稚園の園舎として利用されてきたが、老朽化によって、取り壊しも検討されていた。

この場所を残そうと立ち上がったのは、美唄市出身の彫刻家、安田侃^{かん}さん。1992年、美唄市との協力により、ここをアルテピアッツァ(芸術広場)として再生させた。公園内には安田さんの彫刻作品約40点が常設展示され、旧校舎1階には今も園児たちの生活がある。

安田さんの彫刻作品には柵がつけられていない。周囲には作品の名前や解説も見当たらない。広大な公園を彩る紅葉の中に、ぼつん、ぼつんと、真つ白な大理石や、黒光りするブロンズの作品が置かれている。中でもつるりとした肌の白い塊は、「置かれている」というよりも、「いる」という言葉が似合う。遠くに見えろと、自然と引き寄せられて、撫でてみたくなる。手のひらで触れるとひんやりと冷たいのに、なぜか生きているようだった。

幼稚園の玄関にも安田さんの作品がある。「掃除の時間、『お前もきれいにしてやるからな』と話しかけながら、作品を拭く子がいるんですよ」。自身も美唄出身で、来館者の案内役を務めるスタッフの伊東奈美さんが、そう話してくれた。

伊東さんは、ここでのさまざまな出来事を見つめてきた。子どもの手を引いてかつての教室を訪れ、涙する人。落ち葉集めを呼びかけると、自然に手を貸してくれ





約7万平方メートルの広さを有する公園内は、安田侃氏(1945年～)の彫刻作品を眺めながら、自由に散策することができる。自然に囲まれた作品は、季節や時間帯によって違う表情を見せる。2007年4月にはカフェと工房がオープン。工房では、月に一度「こころを彫る授業」が開かれるなど、石を彫る音が響いている。

【アルテピアッツァ美唄】

北海道美唄市落合町栄町

TEL:0126-63-3137

入場料:無料

開館時間:水曜日～月曜日、午前9時～午後5時

休館日:火曜、祝日の翌日(日曜日は除く)

12月31日～1月5日

HP:<http://www.kan-yasuda.co.jp/arte.html>

ブログ:<http://npoarte.blog.ocn.ne.jp/>



いとう なみ

1999年より旧校舎2階のギャラリーで来訪者の案内役を務め、2005年の「NPO法人アルテピアッツァびばい」設立にもかかわる。「この空間を日々見つめる中で感じるさまざまなことを、来訪者の皆さんに少しでも伝えたい」と、訪れる人々を温かく迎え入れている。

美しいだけでは、ここまで心を動かされることはなかっただろう。アルテピアッツァを支える人々の、静かだが力強い未来への想いが、訪れる者に「またここに来よう」と思わせるのだ。

訪れるまで、この場所は美唄の記憶をとどめるためにつくられた場所だと思っていた。それは半分正しく、半分間違っていた。ここには、今もいきいきとした営みがある。そして、この先の未来のために私たちは何ができるのか、何を残せるのかを問い続けている。

が胸に残る。

「人の気持ちに触れるものを作った人がいて、それを感じとることのできる人がいる。ここにいて、人間って捨てたものじゃないな、人とのつながりっていいものだなって思えるんです」——伊東さんの言葉が胸に残る。

近所の人々。安田さんも講師を務める「こころを彫る授業」をきっかけに大理石の彫刻を始め、休みのたびに工房を訪れる夫婦。いつも並んで石を彫り、お弁当を食べ、公園内を散歩して帰っていく。